

どちらも一生懸命

立教小学校チャプレン 西海 雅彦

学校は、教える先生と教わる児童・生徒・学生で構成されています。もちろん、他に事務の方、校務職員、警備の方など多くの方々の支えがあることは言うまでもありません。ざっくり言えば、大人と子どもです。その中で、小学校が一番年齢差があります。以前も書いたと思いますが、わたしは、相手が子どもであれ、同じ人として関わりたいと考えており、この気持ちは変わりません。でも、今回は、ちょっと子どもと大人に分けてわたしが感じたことを書きたいと思います。

コロナ禍のため、今年の夏休みのキャンプは中止となりました。キャンプの代替として校内でデイキャンプが行われました。学年ごと、縦割りごと、それぞれ独自のプログラムとなりました。当然のことながら、いろいろな制限はあったものの、そこは先生たちが工夫を凝らして、楽しいデイキャンプになったのではなかったかと思っています。校内のデイキャンプとはいえ、学期中以外では初めての子どもたちとの触れ合い、話だけではなかなか感じがつかめませんでした。やっていくうちに、多くのなるほどを得た気がします。一番印象に残ったのは、子どもたちの一生懸命な姿です。キャンプで行われているプログラムは、決して特別なことはありません。身近にあるものばかりです。でも、子どもたちの取り組む姿はどうでしょう。とにかく真剣、一生懸命なのです。大人のわたしからは信じられないくらいの熱意、集中力、子どもってそういうものだよと言われればそれまでなのですが…。それまで、こんなに多くの子どもたちと接することのなかったわたしからすれば、これはものすごい驚きなのです。彼らはわたしの想像をはるかに超えていました。

デイキャンプ中に日曜日が2回ありました。人数もそれほど多くないからということで、チャペルに子どもたちを入れて礼拝をしました。そのひとつが、4年～2年のあるクラスの縦割りグループです。1学期中はずっとオンライン礼拝で、子どもたちはそれぞれの教室でテレビを通しての参加でしたから、彼らにとっても久々のチャペル礼拝です。わたしも、まだ一度も対面での礼拝をしたことがなかったので初めての経験です。残念ながら聖歌は歌えませんでした。それでもチャペルでの子どもたちを前にしての礼拝、新鮮な感じがしました。司式席から子どもたちの姿を眺めながら、対面だとこんな風になるのかあとと思いました。コロナ禍前まで当たり前のようになされていた対面礼拝、久々のスタートです。わたしが声を発して子どもたちが応答、その第一声にわたしは度肝を抜かれました。その迫力に吹き飛ばされるのではと思ったほどです。今のご時世、声を出すことはあまり褒めてはいけないのでしょうか…。でも、オンラインでは聞こえなかった彼らの応答の反応の良さ、声の大きさには感激でした。もし、本来の人数が入ったらどれほどのボリュームになるでしょう。これでわたしのスイッチが入りました。だったら、こっちも気合を入れてできるだけ通る声でハッキリと。わたしの場合、礼拝の司式での声の音量は、マイクもありますのでほどほどというのがそれまでの慣習だったのですが、この時はかなり力が入りました。

6年生のプログラムの一つに“逃走中”という遊びがありまして、簡単に言えば、先生たちが捕まえる役、子どもたちは捕まらないように逃げ回る役、いわばドロケイを少し格

調高くしたような鬼ごっこです。ハンターの先生たちは上下黒の服を着て追いかけるわけですが、そのとき、たまたま黒っぽい服を着ていたわたしを見たときの子どもたちの驚きようといったら、もう心臓が止まるのではと考えるほどの彼らのびっくりした姿を、わたしはただ笑って見ていましたが、後で思い返して、彼らは本当に真剣に逃げ回っていたんだなあ、こんなところにも彼らの必死さを感じました。先生たちも、猛暑の中、熱を吸収するような真っ黒な服にサングラスという姿で・・・大変な役です。でも、汗だくになりながらも必死に子どもたちを追いかける姿、これまた凄いと思いました。

1年生は、遠足を中止した代わりに、講堂でパントマイムを観ることになりました。わたしなどは、後ろの方でぼーっと観ていたのですが、子どもたちは、一つ一つの演技に、わーっ、えーっ、と歓声を上げていました。わたしと見方が明らかに違いますね。最後の場面では、ほとんどの子どもたちが立ち上がって一緒に踊る、参加するってこういうことなんだなあ、可愛かったです。

さて、数日の校内でのデイキャンプでしたが、たくさんの発見やなるほどがありました。参加する前は、まあ、ほどほどに、子どもたちに合わせたらいいのかな・・・というのが正直な気持ちでした。でも、子どもたちと生で関わって気持ちが変わりました。子どもたちは、制限された中でも、とにかく一生懸命やっている、子どもたちの一生懸命さって、彼らの年代ということももちろんあるのでしょうか・・・。1学期を思い返せば、子どもたち、短い休み時間でもグラウンドや体育館で思いっきり走り回っていました。こっちは、もうあまり時間はないよと言っても、まだ5分あるからと言ってすぐ遊び始める、チャプレン室でもまだ3分あるからと言っ

て珍しそうにありふれた物を眺める、まずここが違うのかなあと。わずかな時間でも上手に使っている、子どもたちの方が時間を大切に使っているんですよ。

子どもたちが一生懸命になるためには、大人も一生懸命でなければならないということも教えられました。大人が子どもたちのために一生懸命になる姿って素晴らしいというのは、以前からいくつかのシーンを見て何度も感じており、その思いはわたしの頭の片隅にありました。この夏のデイキャンプは、眠っていたその思いを、奥底から引っ張り出してくれた出来事でした。わたしもこれまで全く子どもたちと関わったことがなかったわけではありません。日曜学校や幼稚園で、少人数ではありますが多少は関わりました。でも思い出してみると、何となく子どもたちに合わせていたと思います。こっちが加減をして子どもたちに向かっていたわけです。

でも今はちょっと違います。大人を前面に出したい気持ちです。つまり、大人が子どもたちに合わせるというより、思いっきり大人を子どもたちの前にさらけ出したい、今は理解してもらえなくてもいい、そんな気持ちです。大人の本気とでも言いましょうか……。授業はもちろんのこと、褒めるときも叱るときも、遊ぶ時も会話するときも・・・子どもだからといって手は抜かないよという本気モード、そうした姿が、子どもたちをより一生懸命にさせるのかなあと思います。もちろん限度はあるでしょうが。大人が真剣ならば、子どもたちも真剣になるでしょう。大人が手を抜けば、子どもたちはそれをすぐ見抜き、それなりの関わりでくるでしょう。つまり、それぞれの今の立場 - 決して変えることのできない大人であり子どもであることの実現 - を隠すことなくそのまま出した関わり、これがわたしの理想です。